



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 4377 号 2018.5.14 発行

公での発言困難「知って」 場面緘黙バー、当事者主催 西日本新聞 2018年05月12日



大阪・心斎橋で開かれた「場面緘黙バー」。奥右は主催者の「みなきんぐさん」こと檜松美奈子さん=12日午後

言語能力には問題がないのに学校や職場など公の場で話せなくなる「場面緘黙症」を広く知ってもらおうと、当事者の女性が12日、大阪・心斎橋で交流イベント「場面緘黙バー」を開催した。今月下旬以降、全国各地で開催する予定。

主催者は「みなきんぐさん」の名前で活動し、各地で発達障害の人らが集う「発達障害バー」を開催している檜松美奈子さん（28）。自らも幼少期の健診で発達障害と疑われ、大人になって確定診断を受けた。場面緘黙症にも苦しんだ。檜松さんは「当事者が身構えず、お気に入りの店に入る感覚で気軽に参加できるような場にしたい」と話す。

必要な支援 ひと目で 南房総市、高齢者や障害者らへ「ボンダナ」を無償配布



東京新聞 2018年5月13日
布製防災用具「ボンダナ」=南房総市役所で

南房総市は、災害時に自ら避難するのが困難な高齢者や障害者らが、どんな支援を求めているかをアピールできる布製防災用具をつくった。「耳が聞こえない」など、自分が必要な支援を書き込める90センチ四方の黄色い布を、ポンチョのように羽織ったり、ボンダナのように頭や首などに巻いたりできることから、「ボンダナ」と名付けた。

7月以降、市内の要支援者ら1820人に無償で配り、避難所29カ所でも20枚ずつ備蓄する。ボンダナやスカーフで同様の防災用具をつくった浦安市や習志野市の取り組みを参考に、南房総市は、視覚障害者でも見やすいとされる黄色を選び、手足が不自由な人や大柄な体格の人が頭からかぶりやすいよう、中央部分に40センチの切れ目を入れるなど工夫をこらした。

市の担当者は「住民からは災害時に支援を待つより、自らアピールする方が有効という意見も寄せられている。災害時の避難に役立ててほしい」と話している。（山口登史）

郵便投票の対象、要介護3へ拡大 自公改正案

東京新聞 2018年5月13日

自民、公明両党は、国政や地方の選挙の際に、介護保険制度で介護の必要度が最も重い

要介護5などに限定的に認められている郵便投票について、要介護3と4の人にも対象を拡大する公選法改正案をまとめた。高齢化社会を迎え、在宅介護など投票所へ足を運ぶのが難しい人の投票環境を改善するのが狙い。実現すれば、新たに約百六十二万六千人が対象となる。関係者が十二日、明らかにした。

郵便投票の対象者内訳

現行制度	新制度
重度の障害者等 約164.8万人	重度の障害者等 約164.8万人
要介護5 約59.7万人	要介護3～5 約222.3万人
	内訳
	5 約59.7万人
	4 約77.9万人
	3 約84.7万人

(注) 重度の障害者等は2015年度末、それ以外は18年2月末時点(いずれも厚生労働省調査)

来年の統一地方選や参院選をにらみ、議員立法による今国会での成立を目指し、野党にも呼び掛ける。自公両党は今月下旬にそれぞれの党内手続きに入る見通しだ。

郵便投票は、有権者が市区町村の選挙管理委員会から投票用紙を取り寄せ投票する仕組み。事前に

選管に「郵便等投票証明書」を請求するなどの手続きが必要で、重度の障害がある人に認められ、二〇〇四年から介護保険制度の要介護5の人も対象になった。昨年の衆院選小選挙区への投票で利用したのは約二万二千人だった。

自公の公選法改正案は郵便投票を利用できる対象について「自ら投票所に行くことが不可能、または著しく困難な状態を示す障害の区分または要介護状態区分に該当するもの」と明記。要介護3まで対象を拡大する。法改正後、政府は視覚障害者など一部の例外を除き、有権者本人が投票用紙に記入する必要があることなどを周知徹底し、選挙の公正性を担保する方針だ。

ハンセン病 病歴、2割隠す 療養所退所者、差別に不安 支援団体調査

毎日新聞 2018年5月12日

ハンセン病問題に関する啓発や元患者の生活支援に取り組む「ふれあい福祉協会」（東京都渋谷区）は11日、療養所を出て社会復帰した「退所者」を対象に実施したアンケートの結果を発表した。病歴を誰にも告知していない人が2割、いまだに病気への差別や偏見があると感じている人が3割おり、差別や偏見が解消されない中で、不安を抱えながら社会で暮らしている実態が明らかになった。

ハンセン病患者の強制隔離を定めた「らい予防法」の廃止（1996年4月）から20年が経過したのを機に、2016～17年、全国の退所者に面接調査を行い、155人から回答を得た。回答者の平均年齢は77・4歳。

病歴の告知（複数回答）は、「誰にも話していない」19・4%▽「配偶者に伝えている」35・5%▽「子どもたちにも伝えている」26・5%▽「近隣の人にも伝えている」13・5%—などだった。

「現在困っていること」（同）は、「在宅生活が難しくなった時の居場所」と「重度の障害を持ったらどうするか」がいずれも34・8%で最も多く、「（病気への）差別や偏見がある」も34・2%あった。「病歴を明かして医療や介護を受けづらい」との回答も2割程度あり、老後の医療や介護に不安を抱えていることが分かった。

協会は「相談する相手がない退所者への個別支援を急ぎたい」と話している。国が退所者の生活支援のため支給する「給与金」の受給者は1097人（17年7月現在）。【江刺正嘉】

若狭の古民家が美術館に 障害者の作品など展示、活動の発信拠点に

産経新聞 2018年5月13日

国の重要伝統的建造物群保存地区に選ばれている若狭町の「熊川宿」に、江戸末期の古民家を改修した「熊川宿若狭美術館」がオープンした。障害者のアート作品の展示を中心

に、児童や高齢者らの生涯学習の場としても活用。地域活性化に向けて、文化芸術活動の発信拠点を目指していくという。

古民家は木造2階建て、延べ床面積は約240平方メートル。熊川宿の中心部にあり、江戸時代は荷物の中継問屋、明治時代には銀行、その後は酒店の倉庫に使われていたという。

美術館の運営を担うのはNPO法人「若狭美&Bネット」。美術を通じた生涯学習の場の提供、障害者の制作活動支援などに取り組んでおり、熊川宿の駐在所跡に障害者の作品を展示する画廊を運営していた。

同町などから古民家の活用を提案され、昨年10月からギャラリーや展示スペース、作業場を整備するなど改修を進めていた。大阪府内に住む所有者が建物を無償で提供。事業費は5610万円で、日本財団（東京）が4240万円を助成し、残りは県と同町の補助を受けた。

館長を務める元県立美方高校長で同NPO理事長の長谷光城さん（74）は「今後も企画展を開催していきたい。障害者と子供、現代芸術作家の作品を同じように展示し、新しい共生社会を発信していきたい」と話した。

同町などに住む障害を持つアーティストの作品を集めたオープニング企画展が7月30日まで開かれている。開館は金～月曜日と祝日。入場無料。問い合わせは同美術館（電）050・3565・5885。

「障害者シンクロ」国際化進む 京都発祥、12日からフェス



京都新聞 2018年5月12日
フェスティバルに向け練習する選手たち(京都市左京区・市障害者スポーツセンター)

京都発祥のスポーツ「障害者シンクロナイズドスイミング」が、国際化を進めている。12、13日両日に開かれる恒例の「障害者シンクロフェスティバル」では、イタリアからシンクロ（現アーティストックスイミング）混合デュエットで世界王者になった男性が出場。今年

初めてソロ競技会の「国際」大会も試行する。

障害者シンクロは1983年、森田美千代・日本障害者シンクロナイズドスイミング協会会長＝宇治市菟道＝が、障害の有無に関わらずシンクロを楽しもうと京都で指導を始めた。

森田会長が3年前、台湾で行われた競技のシンポジウムに参加したことを機に、海外との交流が生まれた。今年は米国、ブラジル、メキシコ、イタリアから過去最多の24選手がエントリーする。イタリアからは、昨年ハンガリーで開かれた水泳世界選手権で1位になったジョルジョ・ミニシニ選手が、ダウン症の女子選手と組んで出場する。

また、競技の国際ルールを定めようという試みで、国内外の選手が競う「ソロ競技会」を初めて実施する。競技会に出場する足立千栄子さん（37）＝久御山町＝は「笑顔が全開になるような演技がしたい」と意気込む。森田会長は「国際ルールを作り、将来はパラリンピックの競技を目指したい」と話している。

フェスティバルは京都市左京区の市障害者スポーツセンターで、12日午後6時からソロ競技会、13日午前10時から発表会がある。観覧無料。

認知症に備える 「コグニサイズ」で脳生き生き 毎日新聞 2018年5月13日 ＜くらしナビ ライフスタイル Second Stage＞

認知症予防の研究は年々進んでいる。運動の面では、頭と体を同時に動かす体操「コグ

「コグニサイズ」が効果的で、認知機能の維持に効果があると注目されている。さらに近年、「歩幅」が認知症の発症リスクに関係することがわかってきた。



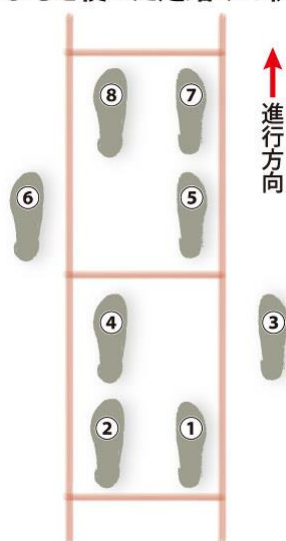
横断歩道の白線部分を使って、歩幅をチェックできる。つま先を白の起点に合わせて1歩でまたげれば合格＝さいたま市浦和区で、梅田啓祐撮影

コグニサイズに挑戦する人たち。縄ばしご状のひもの上を、数を数えながら足踏みして進む＝横浜市中

区の横浜中央YMCAで、梅田啓祐撮影



ひもを使った足踏みの例



※①～⑧の順に進む

●頭と体同時に鍛錬

「1、2、3、4……」。

60～80歳代の男女13人が、床に広げた縄ばしご状のひもの上を、列を組んで進んでいく。1から8まで数えながら、はしごの1マスにつき4歩ずつ足踏みするのがルール。横浜市中区の「横浜中央YMCA」の体育室で週1回行われている「脳いきいき体操」講座の人気プログラム「コグニサイズ」が始まった。

約10分後、スタッフの水落綾花さん（29）が「3と6の時にはマスの外を踏みましょう」と指示を出すと、とたんに難しくなった。指示通りに足が動かず、立ち止まる人や「あれ、間違えちゃった」と照れ笑いを見せる人が相次ぐ。

コグニサイズは足踏みなどの有酸素運動をしながら脳を鍛える体操だ。横浜中央YMCAは2015年から講座に導入している。水落さんは「短い時間でも、習慣づけることが大切。時々間違えるぐらいが脳にとってはいい刺激になる」と言う。

毎週参加している川崎市の林保明さん（67）は「大抵のことはクリアできるが、一度にいくつも指示を出されると難しく感じる。楽しみながら、頭と体を同時に鍛えられるのは一石二鳥だ」と笑顔で話す。

コグニサイズの名称は、英語のコグニション（認知）とエクササイズ（運動）を組み合わせた造語で、国立長寿医療研究センター（愛知県大府市）が考案した。センターは、コグニサイズに取り組む大府市の高齢者約4200人を11年から4年間にわたって観察した。その結果、当初の認知機能検査で、日常生活に支障はないが認知症一歩手前の状態の軽度認知障害（MCI）と判定された人の46%が正常に戻ったという。17年夏に論文にまとめて発表し、注目が集まった。

●手軽で多彩さ魅力
実際にはどんなことをすればコグニサイズになるのか。仲間としりとりしながらウォーキング▽足踏みしながら100から3ずつ引いていく引き算▽数字の代わりに50音を使って「あ、い、う」「え、お、か」と言いながら、3音区切りの「う」「か」で手をたたき▽仲間と足踏みしながら、4歩目に直前の人と言った曜日の2日前の曜日を順番に唱えるーなどがある。適切な負荷を体と脳にかけることで認知機能を保ち、向上させるというわけだ。手軽で、バリエーションが無限にある点も魅力だ。

研究成果を踏まえ、自治体も積極的にコグニサイズの普及を進めている。特に神奈川県は14年度から国立長寿医療研究センターと連携し、コグニサイズの全県展開に向けた取り組みをスタート。作業療法士など、介護予防に関わる専門職の人たちを対象とした研修会なども実施し、講師の養成に努めている。

●「歩幅広く」意識を

日常の体の基本的な動きも研究対象になっている。この数年「歩行」、つまり歩くことが認知症の発症リスクと関係しているという研究が注目されている。東京都板橋区の都健康長寿医療センターの谷口優研究員らのグループは、歩く速さと姿勢、歩幅といった、歩くための機能と将来の認知症の関連性に着目した。認知症でない高齢者1686人を最大12年間追跡調査し、歩く速度が加齢によって変化するパターン別に認知症の発症リスクを比較した。その結果、歩く速度が「速く保たれている」グループに比べて「加齢に伴い遅くなる」グループは、認知症の発症リスクが約2倍高まっていたという。同様に歩幅も「加齢に伴い狭くなる」グループは、「広く保たれている」グループに比べて認知症の発症リスクが約3倍高まっていた。

谷口さんは「歩幅が狭くなるのは、脳の萎縮やわずかな脳梗塞（こうそく）、血流低下などが原因と考えられ、脳の異変が表れている。歩幅は認知機能の衰えや入院、要介護のリスクが高まる可能性を映す鏡といえる」と解説する。歩いている最中は無意識に、路上の障害物や路面の凹凸を確認した上で、歩幅を調節している。実は脳内で複雑な情報処理が行われているというわけだ。

歩幅とは、後ろの足のかかとから、1歩踏み出した前の足のかかとまで、つまり歩く時のかかとからかかとまでの距離を指す。では、どれくらいの歩幅で歩けばいいのか。自分の歩幅が広いか狭いか、手軽な確認方法が谷口さんおすすめの「横断歩道チェック法」。横断歩道を渡る時に、白線を踏まずに1歩でまたぐことができたなら合格という簡単な方法だ。一般的な横断歩道の白線の幅は約45センチ。それだけの幅をあけて、いつも歩ければいい。実際に試す場合は、車やバイクが通らない時を選ぶなど注意が必要だ。

「歩幅を意識して歩くのはいいこと尽くし。腕を大きく後方に引き、広い歩幅で歩くと、普段使っていない筋肉を使うことになり、脳にも新たな刺激が加わる。また、歩幅を意識して歩くことで背筋がスッと伸び、若く見られるようになる。やって損はありません」と谷口さん。年齢に関わらず、日々の歩き方を改善してみたい。【梅田啓祐】＝次回は20日掲載

介護事業所運営の社会福祉法人 10周年で式典 高砂 神戸新聞 2018年5月13日



ボランティアに感謝状を手渡す橋本喜代子理事長（手前右）＝ユーアイ帆っとセンター

兵庫県高砂市で身体障害者が通う生活介護事業所「ステップハウス」を運営する、社会福祉法人「竜山会」の創立10周年を記念する式典が12日、ユーアイ帆っとセンター（同市高砂町松波町）で開かれた。利用者やボランティアら約90人が出席し、これまでの道のりを振り返った。

ステップハウスは、市内に身体障害者が通う施設がなかったことから、保護者らが中心となって前身の小規模作業所を1997年に開設。2006年に竜山会を設立し、新たな施設を同市松陽4にオープンした。

現在は東播地域を中心に20～40代の約20人が通う。「さをり織り」の作品展を開くなど、積極的に地域と交流を続けている。

式典では橋本喜代子理事長があいさつで、歴代の法人関係者やボランティアらに「皆さんの協力なくしては今日を迎えることはできなかった。地域で共に生きるという理念を支えてもらっている。これからもよろしくお願ひします」と感謝の気持ちを伝えた。かつてよく歌っていたという「TOMORROW（トゥモロー）」を全員で歌った後、ボランティアらに感謝状を贈った。

姫路聖マリア病院（姫路市）重度障害総合支援センターの宮田広善さんによる講演もあった。（切貫滋巨）

生き苦しさ 励ます音色 無料演奏会 かほくで開始へ 中日新聞 2018年5月13日



歌い、手本を示す吉内晶さん（左端）。右端は桜井晴美さん＝かほく市高松産業文化センターで企画の桜井さん「人は弱いもの」

かほく市の高松少年少女合唱団主宰の桜井晴美さん（56）＝同市高松＝が、発達障害などで生き苦しさを感じている人らを音楽で励ます事業を企画している。「かほく浜防風プロジェクト」と称し、来年にかけて市内で無料のミニコンサートを六回実施する。

ミニコンサートには、昨年八月に合唱団が主催したミュージカルに出演した金沢市在住の声楽家二人と、かほく市高松出身のピアニストが出演するほか、何回かは合唱団も共演する。

事業名は海岸に自生し、近年は市内で減少しつつあるという植物のハマボウフウにちなんだ。桜井さんがハマボウフウを題材に「ただただ生き延びて」という願いを込め十年前に作詞した楽曲「砂に震えて」を事業のテーマ曲にして各会場で披露する。来年十一月に最終コンサートを行い、会場全員で合唱し、CD化する。

十二日は、市高松産業文化センターで合唱団が「砂に震えて」の練習を開始した。ミニコンサートに出演する声楽家吉内晶さん（41）が自ら歌って手本を示しながら子どもたちを指導した。

桜井さんは「子育て中の親や高齢者、障害者ら普段コンサートに接する機会が少ない人たちにぜひ聞きに来てほしい」と呼び掛ける。吉内さんは「人は弱いものであり、『ただただ生き延びて』というプロジェクトの趣旨を胸に歌わせてもらうつもり」と話していた。

一回目のミニコンサートは二十二日、かほく市の県立高松病院高松デイケアセンターで開催する。（島崎勝弘）

<NEWS EYE>高齢者 人手不足救う 読売新聞 2018年05月13日

◇定年引き上げ・廃止の企業増

少子高齢化で生産年齢人口（15～64歳）が減少していく中、高齢者の活躍の場を広げるため、従業員の定年を引き上げたり、定年制を廃止したりする企業が増えてきた。高齢者の就業を促す企業の実情を探った。（道念祐二）

「気分はどうですか？」。宇治市の高齢者福祉施設で、職員の沢田玉美さん（71）が車椅子の女性の表情を確認しながら優しく声をかけた。

電子部品の検査を手がける「マイクロ」（宇治市）が営む小規模多機能ホーム「まごころ大久保」。同社は検査事業の縮小に伴い、2001年に介護事業に進出した。1972年の会社創業時から働く沢田さんは8年ほど前、介護事業部に移り、利用者の入浴や着替えの介助、トイレへの誘導などに従事する。

従業員約200人のマイクロは約10年前、60歳だった定年を65歳に引き上げ、5年前にはさらに70歳とした。沢田さんを含め70歳を超えるパート社員が3人おり、正社員の最年長は64歳だ。経営管理室長の阿比留隆行さん（39）は「介護部門は3年ほど前から人手不足感が強くなっている。定年が60歳のままだったら、現在の従業員数は確保できていなかったら」と話す。

同社では、60歳を超える従業員でも毎年、昇給がある。阿比留さんは「昇給額は少な

いが、従業員のやる気につながっている。特にケアマネジャーは不足しているので、求人の際、『60歳超でも昇給』を強調している」と説明する。

沢田さんは週4、5日、午前7時から午後4時まで働く。「介護職は人を助ける仕事なので、自分自身が元気でなければならない。前向きに働いていきたい」と力を込めた。

三十三間堂（東山区）近くで「ホテル東山閣」を運営する山陽興業（同）は、約20年前に定年制を廃止した。創業家の当時の社長が「同じフロントを担当していても、若手と年配の社員では経験値が違う」と、定年制廃止とともに正社員全員を年俸制とした。

取締役総務部長の山田與四男さん（69）は「定年制廃止と年俸制で働く意欲を持ってもらえる」と話す。正社員約50人のうち60歳以上は15人で、最年長は73歳の男女2人。男性はボイラー管理、女性は仲居を務める。山田さんは「女性はサービススタッフを仕切る役割も担い、いてもらわないと困る存在。宿泊業の人材は同業他社への転職も多く、60歳超の社員の確保は経営面で重要だ」と強調する。

京都労働局職業対策課は「人手不足感の高まりから高齢者の雇用は今後も進むだろう」と分析している。

<「継続雇用制度」導入81.2%>

京都労働局がまとめた2017年の府内の高齢者雇用状況調査（6月1日時点）からも、高齢者が活躍する企業が着実に増えている流れが浮き彫りとなる。

従業員31人以上の対象企業2946社のうち2923社（就業規則に明示していないなどの23社を除く）で、60歳以上でも何らかの形態で働ける「継続雇用制度」を導入している企業は2374社（81.2%）。定年を引き上げているのは482社（16.5%）、定年制を廃止しているのは67社（2.3%）だった。

全対象企業の定年制度の導入状況を見ても、高齢者が働きやすい環境が整いつつあることが分かる。定年を65歳にしているのは前年比23社増の437社（14.8%）で、66歳以上としているのは同18社増の45社（1.5%）に上った。正社員や嘱託など雇用形態は問わずに70歳以上でも働けるのは、同53社増の628社（21.3%）と2割を超えた。

総務省によると、17年10月1日時点の日本の総人口（1億2670万6000人）のうち、15～64歳の生産年齢人口は前年比60万人減の7596万2000人で、総人口に占める割合は60%。その一方、65歳以上の高齢者は同56万1000人増の3515万2000人で、総人口の27.7%を占め、過去最高となった。

増加する高齢者は、労働力不足を解消する貴重な働き手として期待されている。

◆府内の2017年の高齢者雇用状況
(京都労働局調べ)

企業の従業員数	継続雇用制度の導入	定年の引き上げ	定年制の廃止
全企業(31人以上)	81.2%	16.5%	2.3%
31～300人	79.8	17.6	2.5
301人以上	93.8	6.2	0.0

シングルマザーの妹を見て「支えが必要」 姉妹でつくる、子どもの居場所



沖縄タイムス 2018年5月13日

「ひとり親家庭の子どもと親を支えたい」。沖縄県南城市大里の金城里奈さん（34）と麻希さん（31）の姉妹が「Big Mamaプロジェクト」と名付けた子どもの居場所づくりに取り組んでいる。姉妹の両親や親戚が運営資金や場所を提供、全面的にバックアップする。姉妹は9日までに4～12歳を対象とした一時預かり施設「侑遊（ゆうゆう）」を開所。7月には同施設で子ども食堂や学習支援を始める予定だ。

(南部報道部・知念豊)

「ひとり親の子どもも親も支援したい」と話す金城里奈さん（後列左から2人目）と麻希さん（同3人目）姉妹。麻希さんの子どもたちも事業を応援している＝7日、南城市大里

麻希さん自身、5歳から小学6年生までの5人の子を持つシングルマザーだ。以前勤めていた飲食店では、子どもの病気で休まなければならないことが多く、居づらくなって退職するなど、ひとり親の苦労を経験してきた。

そんな妹の奮闘を見て里奈さんが「子育てには支えが必要で、ひとり親とその子どもを支援する仕組みを作りたい」と事業を計画した。

事業の運営に当たっては、4月10日付で一般社団法人「とみ会」を設立。法人名は祖母の大城とみさん（86）にちなんだ。姉妹にとってとみさんは、仕事で忙しい両親に代わり成長を見守ってくれた「ビッグママ」だからだ。

とみさんは、12年前に亡くなった祖父重成さんの話をよくする。障がい者や仕事のない地元の若者を家に呼んで、食事を与えていたという。姉妹は他人のために奔走する祖父母の影響を受け、「困っている人を永続的に支援する環境を地元の大里につくりたい」と力を込める。

いまや各地にある子ども食堂だが、市大里と知念にはまだない。市児童家庭課の担当者は「大里での子どもの居場所づくり事業は大歓迎。国の助成金を活用して、市も活動を支援したい」と話す。

「とみ会」は、看護師として働く里奈さんが代表理事、介護福祉士の資格を持つ麻希さんが副理事長を務める。運営資金200万円は両親が負担、施設の場所は親戚がアパートを提供するなど、家族・親戚ぐるみで姉妹の事業を応援する。

一時預かりは麻希さんが常駐するほか、看護師の母や、保育園で勤めた経験のある伯母さんも協力を約束。麻希さんも保育士の資格取得を目指して勉強中だ。里奈さんは「安心して子どもたちを預けてほしい」と呼び掛けた。問い合わせは「とみ会」、電話 098(955)7032。

人事院に研修強化要請へ＝セクハラ防止で－野田女性活躍相 時事通信 2018年5月12日

野田聖子女性活躍担当相は12日、福田淳一前財務事務次官のセクハラ問題を受け、セクハラ防止に向けた各府省の職員への研修強化を人事院に求める考えを示した。視察先の宮城県美里町で記者団に「若手の研修は義務付けられているが、幹部は任意でほぼ行われてこなかった。（立場が）強くなればなるほど研修を厚くする方向にしてもらえばいい」と語った。

ちょっとしたことでうまくいく
発達障害の人が
上手に暮らすための本

時間管理ができない 無駄遣いが多い 片付けられない

日常生活の「当たり前」のことが出来るようになる

村上由美

発達障害の当事者である若者が生み出した暮らしのアイデアが満載!

『ちょっとしたことでうまくいく 発達障害の人が上手に暮らすための本』＝村上由美・著

毎日新聞 2018年5月13日

発達障害の人には、「同時並行作業力が弱い」「段取りが取れない」「コミュニケーションが苦手」などの特徴がある。そうしたことに悩む人のために、デジタルの活用法や100円ショップの商品を使ったアイデアなど、上手に日常生活を過ごす方法を伝授する一冊だ。

著書の村上さんは重症心身障害児施設や自治体で、発達障害児や肢体不自由児の言語聴覚療法、相談業務をしてきた。村上さん考案の実践的なアイデアが豊富に紹介されている。（翔泳社、1728円）



月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行